

コメント：安田 均 『生産的労働概念の再検討』¹

小幡道昭

2016年8月9日

¹SGCIME 夏合宿研究会

はじめに

労働の実相が大きく変貌している時代状況のなかで、あらためて労働概念に積極的な理論的考察を加えた労作として評価したい。原理論は純粋資本主義をあつかうのであり、そこでは機械制大工業の支配のもと、労働は単純労働になりきっていると想定すべきで、それ以上の労働の諸相はブラックボックスに置いておき、段階論で歴史的要因を加味して分析すればよい、といった旧来の方法論から脱却せんとしている。この脱却はこれからの原理論研究では当然のことになるだろう。このように積極面を評価したうえで、以下では、遠慮なく批判的検討を加えてゆく。

二重の意味

- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが

二重の意味

- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生みだす労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と

二重の意味

- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生み出す労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と
- ②「生産過程でなされる労働」という文字通りの意味がダブって使われてきた。

二重の意味

- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生みだす労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と
- ②「生産過程でなされる労働」という文字通りの意味がダブって使われてきた。
- ②の意味を掘りさげることで、①を再検討するというのが安田氏のねらい

二重の意味

- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生みだす労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と
- ②「生産過程でなされる労働」という文字通りの意味がダブって使われてきた。
- ②の意味を掘りさげることで、①を再検討するというのが安田氏のねらい
- 安田氏のアプローチは、つぎのような私のアプローチと逆。というのでは、議論にならないので....

二重の意味

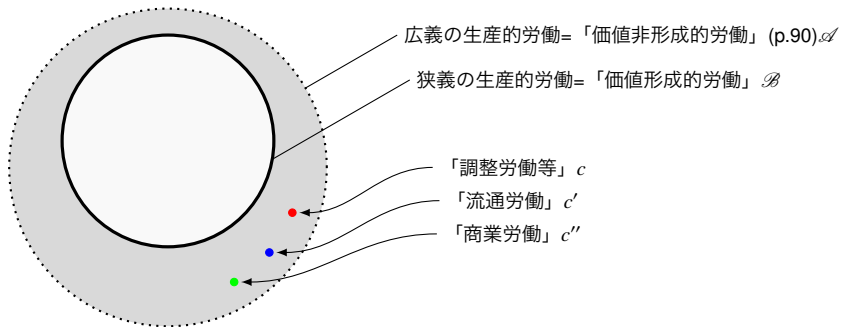
- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生みだす労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と
- ②「生産過程でなされる労働」という文字通りの意味がダブって使われてきた。
- ②の意味を掘りさげることで、①を再検討するというのが安田氏のねらい
- 安田氏のアプローチは、つぎのような私のアプローチと逆。というのでは、議論にならないので....

二重の意味

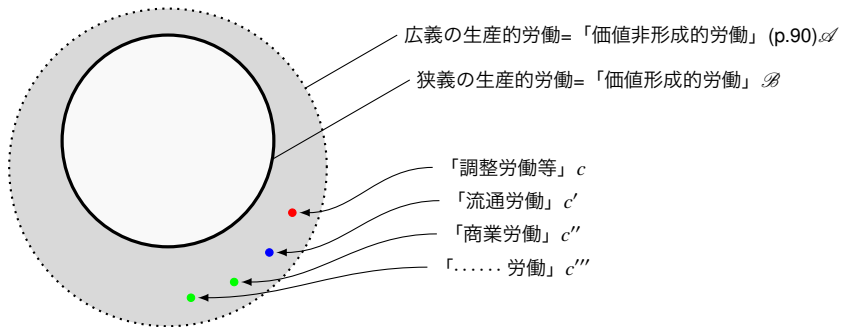
- 本書では「生産的労働」についてかなり立ちいった紹介がなされているが
- 古典派の重商主義批判以来の、①「価値を生み出す労働」（生産的と不生産的の区別）という意味と
- ②「生産過程でなされる労働」という文字通りの意味がダブって使われてきた。
- ②の意味を掘りさげることで、①を再検討するというのが安田氏のねらい
- 安田氏のアプローチは、つぎのような私のアプローチと逆。というのでは、議論にならないので....

生産過程をモノとモノの反応過程と捉え、ただ...「生産過程は労働と緊密に結びついている。「生産的労働」という用語は、何をもって「生産的」というかで拡張され多義化する。この規定は、例えば「価値を生み出す労働」といった狭義の規定もあるが、本書では「生産にたずさわる労働」という意味に限る。」(小幡『経済原論—基礎と演習』148頁)

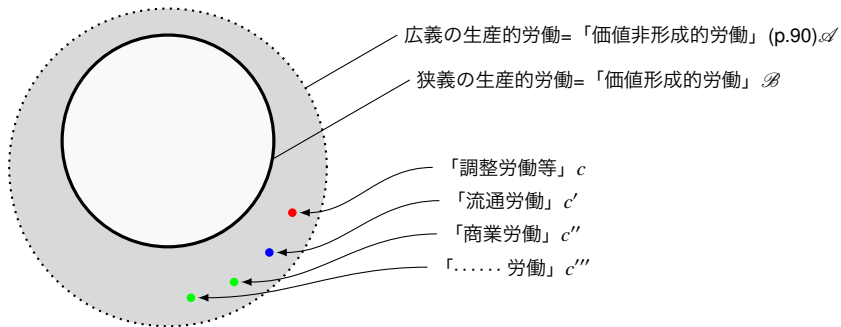
広義・狭義アプローチ批判



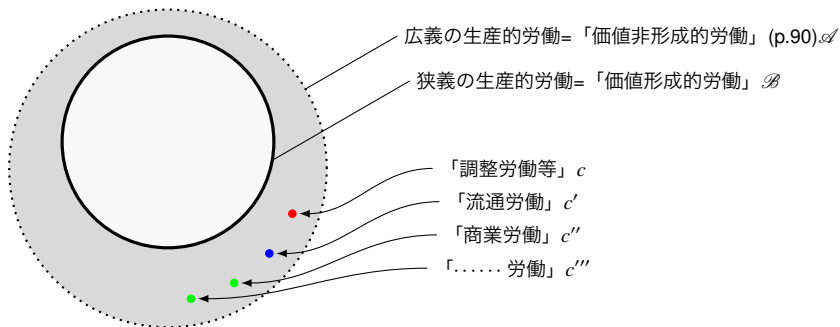
広義・狭義アプローチ批判



広義・狭義アプローチ批判

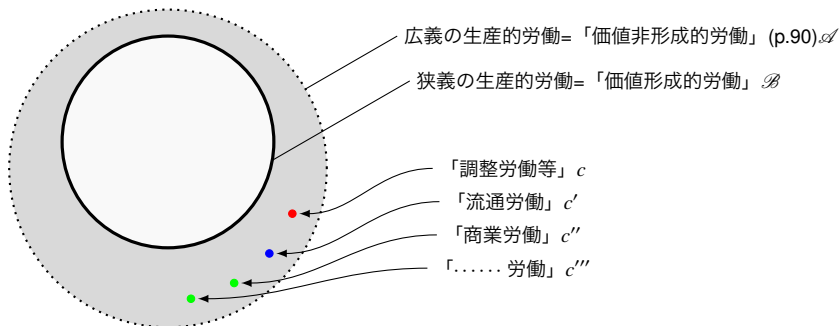


広義・狭義アプローチ批判



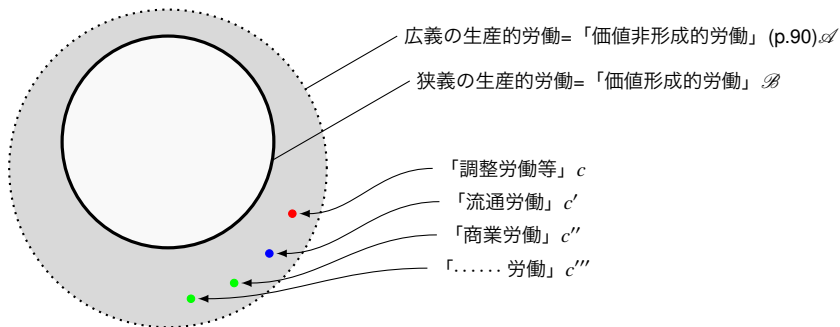
- まず範疇 B を明確に（限定的だから当然）定義（狭義）、これに広義の A を付加
- 範疇 A の定義が曖昧で（「 B でないということは必ずしも A でないことを意味しない」という常套句で導入されるのだが）
- この範疇 A のなかで、 c, c', c'', \dots など、いろいろなものが自由に論じられる。

広義・狭義アプローチ批判



- まず範疇 B を明確に（限定的だから当然）定義（狭義）、これに広義の A を付加
- 範疇 A の定義が曖昧で（「 B でないということは必ずしも A でないことを意味しない」という常套句で導入されるのだが）
- この範疇 A のなかで、 c, c', c'', \dots など、いろいろなものが自由に論じられる。
- しかし、こういうロジックで『資本論』の「生産的労働」の 'double meaning' を継承することには賛成できない。

広義・狭義アプローチ批判



- まず範疇 \mathcal{B} を明確に（限定的だから当然）定義（狭義）、これに広義の \mathcal{A} を付加
- 範疇 \mathcal{A} の定義が曖昧で（「 \mathcal{B} でないということは必ずしも \mathcal{A} でないことを意味しない」という常套句で導入されるのだが）
- この範疇 \mathcal{A} のなかで、 c, c', c'', \dots など、いろいろなものが自由に論じられる。
- しかし、こういうロジックで『資本論』の「生産的労働」の 'double meaning' を継承することには賛成できない。
- 私は、可能なかぎり、範疇 \mathcal{B} と範疇 \mathcal{C} に明晰な定義を与えるべきだと考える。

「生産物の立場」について

- 「生産物の立場からみれば」 = 「生産過程」の本質が、労働生産物を媒介とした「労働過程」と「労働過程」の連鎖 = 「社会的分業」にあるという「解釈」 \mathcal{P} は正しい。

「生産物の立場」について

- 「生産物の立場からみれば」 = 「生産過程」の本質が、労働生産物を媒介とした「労働過程」と「労働過程」の連鎖 = 「社会的分業」にあるという「解釈」 \mathcal{P} は正しい。
- しかし、この \mathcal{P} から命題 \mathcal{Q} : 「生産過程が連鎖をなしていることが明らかにされて初めて生産と最終消費との区別が露わになり、「生産のための労働」、生産的労働も定義可能になる。」(p.86)は導き出せない。

「生産物の立場」について

- 「生産物の立場からみれば」 = 「生産過程」の本質が、労働生産物を媒介とした「労働過程」と「労働過程」の連鎖 = 「社会的分業」にあるという「解釈」 \mathcal{P} は正しい。
- しかし、この \mathcal{P} から命題 \mathcal{Q} : 「生産過程が連鎖をなしていることが明らかにされて初めて生産と最終消費との区別が露わになり、「生産のための労働」、生産的労働も定義可能になる。」(p.86)は導き出せない。
- 個々の労働過程は、通常はどれも、「生産的消費」として連鎖している (= 生産過程を構成している)。

「生産物の立場」について

- 「生産物の立場からみれば」 = 「生産過程」の本質が、労働生産物を媒介とした「労働過程」と「労働過程」の連鎖 = 「社会的分業」にあるという「解釈」 \mathcal{P} は正しい。
- しかし、この \mathcal{P} から命題 \mathcal{Q} : 「生産過程が連鎖をなしていることが明らかにされて初めて生産と最終消費との区別が露わになり、「生産のための労働」、生産的労働も定義可能になる。」(p.86)は導き出せない。
- 個々の労働過程は、通常はどれも、「生産的消費」として連鎖している (= 生産過程を構成している)。
- 労働者の「生活過程」(と資本家の「個人的消費」)だけを、「生産的消費」ではない、と宣言することで、生産と消費の区分は導入される。逆に「社会的分業」の概念から、生産と最終消費の区別が導出されるのではない。

「生産物の立場」について

- 「生産物の立場からみれば」 = 「生産過程」の本質が、労働生産物を媒介とした「労働過程」と「労働過程」の連鎖 = 「社会的分業」にあるという「解釈」 \mathcal{P} は正しい。
- しかし、この \mathcal{P} から命題 \mathcal{Q} : 「生産過程が連鎖をなしていることが明らかにされて初めて生産と最終消費との区別が露わになり、「生産のための労働」、生産的労働も定義可能になる。」(p.86)は導き出せない。
- 個々の労働過程は、通常はどれも、「生産的消費」として連鎖している (= 生産過程を構成している)。
- 労働者の「生活過程」(と資本家の「個人的消費」)だけを、「生産的消費」ではない、と宣言することで、生産と消費の区分は導入される。逆に「社会的分業」の概念から、生産と最終消費の区別が導出されるのではない。
- 生活過程による生産と消費の切断を厳密におこなうには、「労働力の再生産」という概念を捨てる必要がある。

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.



量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。

□

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。
- 2 モノには可測性があり commensurable、自然過程は自然法則にしたがう。

□

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。
- 2 モノには可測性があり commensurable、自然過程は自然法則にしたがう。
- 3 人間は、この自然過程を目的意識的にコントロールできる。

□

量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。
- 2 モノには可測性があり commensurable、自然過程は自然法則にしたがう。
- 3 人間は、この自然過程を目的意識的にコントロールできる。
- 4 適切にコントロールされた反応過程には、自然法則に規定された一定の時間がかかる。



量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。
- 2 モノには可測性があり commensurable、自然過程は自然法則にしたがう。
- 3 人間は、この自然過程を目的意識的にコントロールできる。
- 4 適切にコントロールされた反応過程には、自然法則に規定された一定の時間がかかる。
- 5 → コントロールする側の労働時間の客観的定量性に反映される。



量的確定性

- すべての議論の基礎になるのは、「生産にたずさわる労働」には（1単位生産するのに何分かかかるか？という意味で）量的確定性があるという命題。
- この確定性はどうして生じるのか、証明する必要がある。

証明.

- 1 生産（と消費）とはモノとモノの反応過程（自然過程）に関する規定。
- 2 モノには可測性があり commensurable、自然過程は自然法則にしたがう。
- 3 人間は、この自然過程を目的意識的にコントロールできる。
- 4 適切にコントロールされた反応過程には、自然法則に規定された一定の時間がかかる。
- 5 → コントロールする側の労働時間の客観的定量性に反映される。



- 資本家が締め上げるから量的確定性がでてくるのではない。それはあくまで追加的補助要因。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。
- 「労働力の価値は、その生産に要する生活物資の価値によってきまる」というとき、 $c + \quad \rightarrow \text{labour power } A$ 。生きた労働なき「生産」になっている。これって、一種の

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。
- 「労働力の価値は、その生産に要する生活物資の価値によってきまる」というとき、 $c + \quad \rightarrow \text{labour power } A$ 。生きた労働なき「生産」になっている。これって、一種の

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。
- 「労働力の価値は、その生産に要する生活物資の価値によってきまる」というとき、 $c + \quad \rightarrow \text{labour power } A$ 。生きた労働なき「生産」になっている。これって、一種の 完全オートメーション
- 「搾取論」は、「労働力商品の価値は他の商品と同じように、その生産に直接間接に必要な労働時間によってきまる」という命題にたつ。しかし、この命題にはクラックがある。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。
- 「労働力の価値は、その生産に要する生活物資の価値によってきまる」というとき、 $c + \quad \rightarrow \text{labour power } A$ 。生きた労働なき「生産」になっている。これって、一種の 完全オートメーション
- 「搾取論」は、「労働力商品の価値は他の商品と同じように、その生産に直接間接に必要な労働時間によってきまる」という命題にたつ。しかし、この命題にはクラックがある。
- 通常はこのクラックに気づかない（フリをしてきた）のだが、複雑労働では「労働者の技能を形成する労働」というかたちで、隠された「自己労働」の存在が表沙汰になる。

「複雑労働」問題のコア

- 結論的にいうと、「複雑労働」問題のコアは、生活過程における「自己労働」の位置づけ。
- 「労働力の（再）生産」という概念がかかえる無理。
- 一般に「労働過程」では生産手段が生産的に消費される ($c + \boxed{v+m} \rightarrow \text{product } B$)。これに対して「労働力の生産」では、生きた労働が存在しない。
- 「労働力の価値は、その生産に要する生活物資の価値によってきまる」というとき、 $c + \quad \rightarrow \text{labour power } A$ 。生きた労働なき「生産」になっている。これって、一種の 完全オートメーション
- 「搾取論」は、「労働力商品の価値は他の商品と同じように、その生産に直接間接に必要な労働時間によってきまる」という命題にたつ。しかし、この命題にはクラックがある。
- 通常はこのクラックに気づかない（フリをしてきた）のだが、複雑労働では「労働者の技能を形成する労働」というかたちで、隠された「自己労働」の存在が表沙汰になる。
- 表面上はつまらないパズルだが、背後にある問題は深刻.....

スキルの「生産」

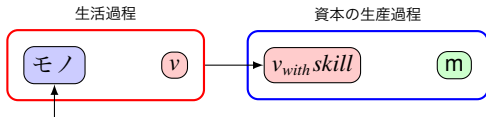
- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。

スキルの「生産」

- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。

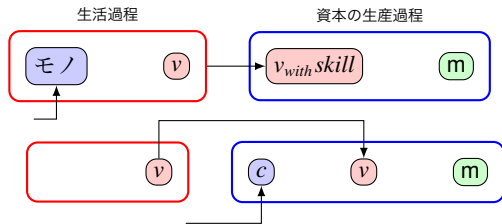
スキルの「生産」

- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。



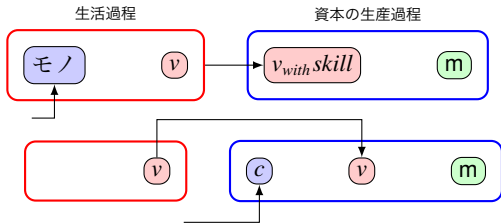
スキルの「生産」

- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。

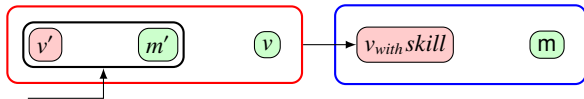


スキルの「生産」

- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。

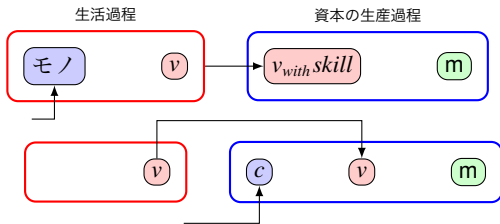


- 2 養成費が、スキルを形成する「トレーナー」に支払われると考えると....

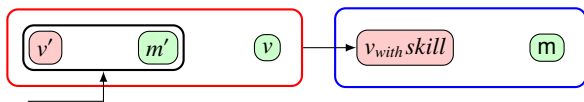


スキルの「生産」

- 1 養成費が、教材のようなモノに支払われるだけなら簡単。スキルは「作業着」のようなもの。労働者が作業着を買ってくれば、作業着代だけ賃金は高くなり、生産物に移転する。資本家が作業着を買ったとき、つまり「単純労働」のときも作業着代は不変資本として、生産物に価値移転する。



- 2 養成費が、スキルを形成する「トレーナー」に支払われると考えると...



- 3 パズル：トレーナーの剰余労働 m' はだれが手にするのか？トレーナー自身か？労働者か？資本家か？

解答：小幡『労働市場と景気循環』p.24-8

スキルの「生産」

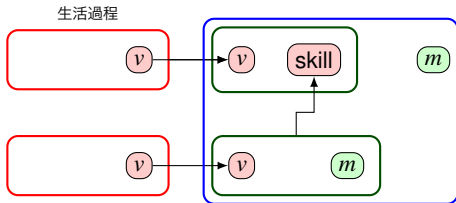
- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...

スキルの「生産」

- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...

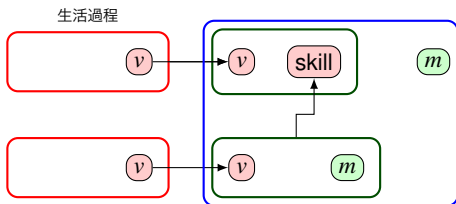
スキルの「生産」

- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...



スキルの「生産」

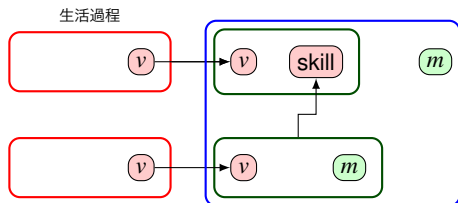
- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...



- 5 トレーナーを雇った資本が、労働者のもとにトレーナーを派遣して skill を形成させ、この複雑労働者が別の資本のもとで労働するとなると....

スキルの「生産」

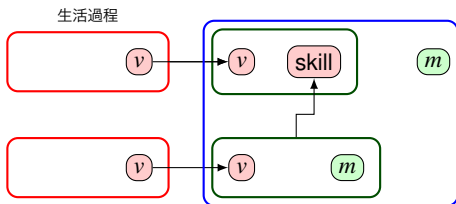
- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...



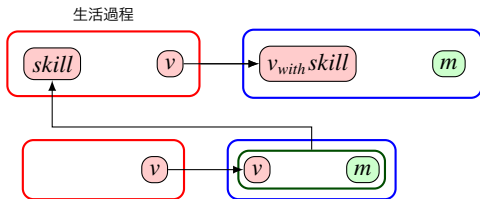
- 5 トレーナーを雇った資本が、労働者のもとにトレーナーを派遣してskillを形成させ、この複雑労働者が別の資本のもとで労働するとすると....

スキルの「生産」

- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...

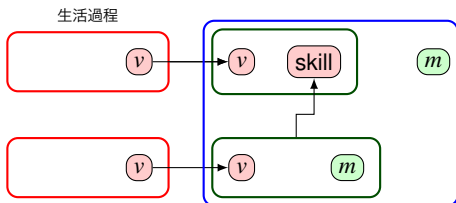


- 5 トレーナーを雇った資本が、労働者のもとにトレーナーを派遣して $skill$ を形成させ、この複雑労働者が別の資本のもとで労働するとなると....

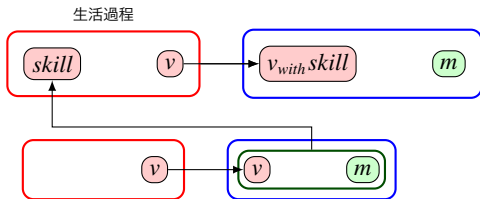


スキルの「生産」

- 4 資本がトレーナーも雇い、自分の雇った労働者にスキルを形成させると...



- 5 トレーナーを雇った資本が、労働者のもとにトレーナーを派遣してskillを形成させ、この複雑労働者が別の資本のもとで労働するとすると....



- 6 いずれの場合も、剰余労働は資本によって取得される。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるということは、「独立小生産者」を想定すること。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるということは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける... など）、

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける... など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける... など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける...など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。
- 破綻... スキルだけではない。そもそも「労働力を生産する」というとき隠されていた「自己労働」が表沙汰になる。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるということは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける...など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。
- 破綻... スキルだけではない。そもそも「労働力を生産する」というとき隠されていた「自己労働」が表沙汰になる。
- 専業主婦の家事労働が賃金労働者の労働力を生産すると考えると、スキルを生産するトレーナーと同じ位置にたつ。つまり、家庭内に独立生産者が存在することになる。

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける...など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。
- 破綻... スキルだけではない。そもそも「労働力を生産する」というとき隠されていた「自己労働」が表沙汰になる。
- 専業主婦の家事労働が賃金労働者の労働力を生産すると考えると、スキルを生産するトレーナーと同じ位置にたつ。つまり、家庭内に独立生産者が存在することになる。
- 解決の道は....

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける...など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。
- 破綻... スキルだけではない。そもそも「労働力を生産する」というとき隠されていた「自己労働」が表沙汰になる。
- 専業主婦の家事労働が賃金労働者の労働力を生産すると考えると、スキルを生産するトレーナーと同じ位置にたつ。つまり、家庭内に独立生産者が存在することになる。
- 解決の道は....

スキルの「生産」

批判の帰結

- トレーナーが労働者の生活過程でスキルを形成させるという、第3のケースは何を意味しているのか？
- 資本に雇われていないトレーナーを考えるとすることは、「独立小生産者」を想定すること。
- トレーナーの間では賃金労働者だが、
- もっと難しいのは、労働者が自らトレーナーの役割をすると考えた場合（たとえば、買ってきたマニュアル本を読んでプログラミングの能力を身につける...など）、
- スキルの形成に費やした労働時間は、トレーナーの労働 $v+m$ と同じ位置。
- 労働者は自分のスキルを「生産」する小生産者になってしまう。
- 破綻... スキルだけではない。そもそも「労働力を生産する」というとき隠されていた「自己労働」が表沙汰になる。
- 専業主婦の家事労働が賃金労働者の労働力を生産すると考えると、スキルを生産するトレーナーと同じ位置にたつ。つまり、家庭内に独立生産者が存在することになる。
- 解決の道は....労働力に生産概念を適用しないこと

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややっこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。
- 3 「還元説」（N.B. 小幡はこの説をとらない）の複雑労働は、「単純労働」とともに「狭義の生産的労働」に属する。単純労働に還元されるのだから当然。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややっこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。
- 3 「還元説」（N.B. 小幡はこの説をとらない）の複雑労働は、「単純労働」とともに「狭義の生産的労働」に属する。単純労働に還元されるのだから当然。
- 4 技術的確定性がない労働をあらためて「複雑労働」とよぶのは自由だが、それはこれまで議論されてきた「複雑労働」とはまったく別規定であることは宣言しておくべき。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややっこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。
- 3 「還元説」（N.B. 小幡はこの説をとらない）の複雑労働は、「単純労働」とともに「狭義の生産的労働」に属する。単純労働に還元されるのだから当然。
- 4 技術的確定性がない労働をあらためて「複雑労働」とよぶのは自由だが、それはこれまで議論されてきた「複雑労働」とはまったく別規定であることは宣言しておくべき。
- 5 「その投入量・時期の判断など、一定の経験、習熟を要する、すなわち特別の訓練を要する労働、複雑労働が存在しうる」というのであるが、これは確かなスキルが存在し、確実に判断できるという意味なのか、そもそもスキルがないので長年のカンにたよるほかない、という意味なのか。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややっこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。
- 3 「還元説」（N.B. 小幡はこの説をとらない）の複雑労働は、「単純労働」とともに「狭義の生産的労働」に属する。単純労働に還元されるのだから当然。
- 4 技術的確定性がない労働をあらためて「複雑労働」とよぶのは自由だが、それはこれまで議論されてきた「複雑労働」とはまったく別規定であることは宣言しておくべき。
- 5 「その投入量・時期の判断など、一定の経験、習熟を要する、すなわち特別の訓練を要する労働、複雑労働が存在しうる」というのであるが、これは確かなスキルが存在し、確実に判断できるという意味なのか、そもそもスキルがないので長年のカンにたよるほかない、という意味なのか。
- 6 スキル、技能というのは、確実に結果をだせる、コントロールできる、という意味であり、これに対して、スキルに還元できない、資本家の「活動」（手段・目的関係が確定できないという意味で労働範疇からこぼれる）も存在するのである。

「複雑労働論の論理構成」 p.113 の問題点

- 1 「「広義の生産的労働」で「狭義の生産的労働」ではない労働」（ややっこしい範疇規定です）＝「調整労働等」が「複雑労働」だという命題は論証されていない。
- 2 「狭義の生産的労働」＝「価値形成的労働」＝（価値重心説）＝「単純労働」という同値規定から、残余部分はそうなるだろうという憶測のみ。
- 3 「還元説」（N.B. 小幡はこの説をとらない）の複雑労働は、「単純労働」とともに「狭義の生産的労働」に属する。単純労働に還元されるのだから当然。
- 4 技術的確定性がない労働をあらためて「複雑労働」とよぶのは自由だが、それはこれまで議論されてきた「複雑労働」とはまったく別規定であることは宣言しておくべき。
- 5 「その投入量・時期の判断など、一定の経験、習熟を要する、すなわち特別の訓練を要する労働、複雑労働が存在しうる」というのであるが、これは確かなスキルが存在し、確実に判断できるという意味なのか、そもそもスキルがないので長年のカンにたよるほかない、という意味なのか。
- 6 スキル、技能というのは、確実に結果をだせる、コントロールできる、という意味であり、これに対して、スキルに還元できない、資本家の「活動」（手段・目的関係が確定できないという意味で労働範疇からこぼれる）も存在するのである。
- 7 ここから安田さんの議論は、私のスキル＝「型づけ」アプローチをめぐって、思わぬ方向に展開してゆく....

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが....

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが....
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが...
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。
- 「型づけ」＝複雑労働説ではありません。それなら「型づけ」なんて聞き慣れないタームを持ちだしたりしません。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが...
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。
- 「型づけ」＝複雑労働説ではありません。それなら「型づけ」なんて聞き慣れないタームを持ちだしたりしません。
- 資本主義のもとで、賃労働のかたちで処理されるスキルは、一定の教習、トレーニング、練習でだれにでも身につく「型」と考えればよい。中味は単純労働で、ただそれが運転の資格もつとか、溶接の資格をもつとか、保育士の免許をもっているとか、いろいろな包装紙（パッケージ）でつつまれて売らる、ということです。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが...
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。
- 「型づけ」＝複雑労働説ではありません。それなら「型づけ」なんて聞き慣れないタームを持ちだしたりしません。
- 資本主義のもとで、賃労働のかたちで処理されるスキルは、一定の教習、トレーニング、練習でだれにでも身につく「型」と考えればよい。中味は単純労働で、ただそれが運転の資格もつとか、溶接の資格をもつとか、保育士の免許をもっているとか、いろいろな包装紙（パッケージ）でつつまれて売らる、ということです。
- この型づけで注意しなくてはならないのは、型づけをする当の労働者の自己労働の問題です。「スキルの生産」のスライドで、三番目に「トレーナー」のケースがむずかしいのだ、といったのですが、

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが...
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。
- 「型づけ」＝複雑労働説ではありません。それなら「型づけ」なんて聞き慣れないタームを持ちだしたりしません。
- 資本主義のもとで、賃労働のかたちで処理されるスキルは、一定の教習、トレーニング、練習でだれにでも身につく「型」と考えればよい。中味は単純労働で、ただそれが運転の資格もつとか、溶接の資格をもつとか、保育士の免許をもっているとか、いろいろな包装紙（パッケージ）でつつまれて売らる、ということです。
- この型づけで注意しなくてはならないのは、型づけをする当の労働者の自己労働の問題です。「スキルの生産」のスライドで、三番目に「トレーナー」のケースがむずかしいのだ、といったのですが、
- 実は本人がスキルを身につけるためにおこなう「労働」がもっと根本的な問題なのです。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 誤解だ、誤読だ、と言いたてるつもりはないのですが...
- 私の「型づけ」アプローチは、スキルに関する従来の単純労働・複雑労働というダイコトミを棄却するの第一のネライです。
- 「型づけ」＝複雑労働説ではありません。それなら「型づけ」なんて聞き慣れないタームを持ちだしたりしません。
- 資本主義のもとで、賃労働のかたちで処理されるスキルは、一定の教習、トレーニング、練習でだれにでも身につく「型」と考えればよい。中味は単純労働で、ただそれが運転の資格もつとか、溶接の資格をもつとか、保育士の免許をもっているとか、いろいろな包装紙（パッケージ）でつつまれて売らる、ということです。
- この型づけで注意しなくてはならないのは、型づけをする当の労働者の自己労働の問題です。「スキルの生産」のスライドで、三番目に「トレーナー」のケースがむずかしいのだ、といったのですが、
- 実は本人がスキルを身につけるためにおこなう「労働」がもっと根本的な問題なのです。
- 私は、この「型づけ」は、パッケージであり、流通費用に類するもので、少なくともスキルを「生産して売る」というアプローチは論理的に不整合をうむと考えています。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。
- さらに、「型づけ」は複雑労働だ、ということから、反対に、ネーキッドな単純労働も実在し、① それらが「日雇い」の「労働市場」を形成し、他方、② 複雑労働が賃労働で調達される、もう一つ別種の「労働市場」が分立する、と考えられたようですが、

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。
- さらに、「型づけ」は複雑労働だ、ということから、反対に、ネーキッドな単純労働も実在し、① それらが「日雇い」の「労働市場」を形成し、他方、② 複雑労働が賃労働で調達される、もう一つ別種の「労働市場」が分立する、と考えられたようですが、
- 安田さんが自説として①と①の分立を唱えられることに異を挟む気はありませんが、

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。
- さらに、「型づけ」は複雑労働だ、ということから、反対に、ネーキッドな単純労働も実在し、① それらが「日雇い」の「労働市場」を形成し、他方、② 複雑労働が賃労働で調達される、もう一つ別種の「労働市場」が分立する、と考えられたようですが、
- 安田さんが自説として①と①の分立を唱えられることに異を挟む気はありませんが、
- 小幡が分立論を唱えている (cf., p.149) というのは誤りです。124頁の引用で「大きく傾いている」というのは、分立・両立という意味ではなくて、「日雇い型労働市場」などほとんど実在しなのだ、という意味なのです。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。
- さらに、「型づけ」は複雑労働だ、ということから、反対に、ネーキッドな単純労働も実在し、① それらが「日雇い」の「労働市場」を形成し、他方、② 複雑労働が賃労働で調達される、もう一つ別種の「労働市場」が分立する、と考えられたようですが、
- 安田さんが自説として①と①の分立を唱えられることに異を挟む気はありませんが、
- 小幡が分立論を唱えている (cf., p.149) というのは誤りです。124頁の引用で「大きく傾いている」というのは、分立・両立という意味ではなくて、「日雇い型労働市場」などほとんど実在しなのだ、という意味なのです。
- 「型づけ」という呼称をもちだして説明したかったのは、労働市場の一般理論です。

「労働市場の分立」 p.121 の問題点

- 安田さんは、私の「型づけ」を「型づけコスト」とよぶのですが、これでは「スキルの生産」のスライドの第1の図で説明した、基本的に問題のないケースになってしまいます。
- さらに、「型づけ」は複雑労働だ、ということから、反対に、ネーキッドな単純労働も実在し、① それらが「日雇い」の「労働市場」を形成し、他方、② 複雑労働が賃労働で調達される、もう一つ別種の「労働市場」が分立する、と考えられたようですが、
- 安田さんが自説として①と①の分立を唱えられることに異を挟む気はありませんが、
- 小幡が分立論を唱えている (cf., p.149) というのは誤りです。124頁の引用で「大きく傾いている」というのは、分立・両立という意味ではなくて、「日雇い型労働市場」などほとんど実在しなのだ、という意味なのです。
- 「型づけ」という呼称をもちだして説明したかったのは、労働市場の一般理論です。
- 労働力商品は、資本によって自由に供給できない商品である、故に、それは内在的価値をもたない、もっぱら需要供給の関係で上昇下落するだけで、ただ、労働力商品の価値の大きさは、景気循環を通じてその重心・中心価格として与えられるのみだ、といったベタな賃金変動論を克服するため理論装置です。話すと長くなりますが、『労働市場と景気循環』の主旨です。

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかという....

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかという....
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ....
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ....
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ...
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は
 - 1 企業特殊的熟練の存在が根本原因

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ...
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は
 - 1 企業特制的熟練の存在が根本原因
 - 2 労働者もこの形成に「コスト」をかけているから辞めると損

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ...
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は
 - 1 企業特制的熟練の存在が根本原因
 - 2 労働者もこの形成に「コスト」をかけているから辞めると損
 - 3 資本家もやはり「コスト」をかけているからやませると損

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ...
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は
 - 1 企業特制的熟練の存在が根本原因
 - 2 労働者もこの形成に「コスト」をかけているから辞めると損
 - 3 資本家もやはり「コスト」をかけているからやませると損
 - 4 ゆえに、勤続が生じるのだ(p.151)。

「勤続」問題

- 関心にズレがあるようで、第3章は私の理解をこえた展開になってゆきます....
- ただ安田さんの興味はこっちにあるようで、小幡も「勤続導出の試み」、つたない試みをして見事に失敗した、という評価で、では、なぜ失敗したかというところ...
 - 1 「型づけコスト」は労働者が自己の負担でおこなう：しかも、それぞれの型に無数の労働者がいる：だから、型があっても資本家は解雇を躊躇しない。
 - 2 「小幡」（どなたか存じませんが）によれば、「組織化コスト」のほうにはもっぱら資本家が支払う：だから、労働者は自由に離職できる。
- これに対する安田さんの解答は
 - 1 企業特制的熟練の存在が根本原因
 - 2 労働者もこの形成に「コスト」をかけているから辞めると損
 - 3 資本家もやはり「コスト」をかけているからやませると損
 - 4 ゆえに、勤続が生じるのだ(p.151)。
 - 5 ... って、かなり労使協調路線ですね、ここだけの話ですが、私にはとてもかけません。イデオロギーにとらわれた古い人間なもので...

「勤続」問題

- ひとまずお答えしておく

「勤続」問題

- ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはあたりですが、「組織化コスト」の問題ではありません。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはアタリですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
- 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」**Massenkraft**の取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはアタリですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
- 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」*Massenkraft*の取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、
- 4 これは、ただ資本が多く労働者は雇用できるというだけで、ひとまず手に入れることはできる。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはアタリですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
- 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」**Massenkraft**の取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、
- 4 これは、ただ資本が多く労働者は雇用できるというだけで、ひとまず手に入れることはできる。
- 5 ただ、それは労働者相互のコミュニケーションに依存しており、労働者集団を日々シャッフルしたのでは思うように利用できない。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはアタリですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
- 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」**Massenkraft**の取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、
- 4 これは、ただ資本が多く労働者は雇用できるというだけで、ひとまず手に入れることはできる。
- 5 ただ、それは労働者相互のコミュニケーションに依存しており、労働者集団を日々シャッフルしたのでは思うように利用できない。
- 6 だから、常備労働者が発生するのだ、というのが一応の説明です。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
- 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはアタリですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
- 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」Massenkraftの取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、
- 4 これは、ただ資本が多く労働者は雇用できるというだけで、ひとまず手に入れることはできる。
- 5 ただ、それは労働者相互のコミュニケーションに依存しており、労働者集団を日々シャッフルしたのでは思うように利用できない。
- 6 だから、常備労働者が発生するのだ、というのが一応の説明です。

- 『資本論』の産業予備軍は、需要供給の不一致による、総量としての失業者の発生ではなく、継続的に失業状態におかれる「予備軍」の形成。

「勤続」問題

■ ひとまずお答えしておく

- 1 「型づけ」は、賃金水準の安定性（労働力商品の価値内在性）を説明する装置の一つで、雇用の継続の説明原理ではありません。
 - 2 同じ労働者が雇われ続ける「勤続」の理由は、労働組織にある、というのはあたりですが、「組織化コスト」の問題ではありません。
 - 3 安田さんはコストに還元して考えるのが得意なのかもしれませんが、ポイントは、コストなしの「集団力」*Massenkraft*の取得です。資本主義的な労働組織のコアは、分業ではなく「協業」にあり、
 - 4 これは、ただ資本が多く労働者は雇用できるというだけで、ひとまず手に入れることはできる。
 - 5 ただ、それは労働者相互のコミュニケーションに依存しており、労働者集団を日々シャッフルしたのでは思うように利用できない。
 - 6 だから、常備労働者が発生するのだ、というのが一応の説明です。
- 『資本論』の産業予備軍は、需要供給の不一致による、総量としての失業者の発生ではなく、継続的に失業状態におかれる「予備軍」の形成。
- なぜ、この継続状態が発生するのかが、理論的に説明されなくてはならない。

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、
- こうした現実問題を原理論で議論するには、徹底的な抽象化が前提となります。

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、
- こうした現実問題を原理論で議論するには、徹底的な**抽象化**が前提となります。
- 「査定」とか「勤続」という歴史的現象を構成するファクタを分析し、たとえば『資本論』冒頭の商品論をこえるレベルまでまず**抽象化**しないかぎり、

方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、
- こうした現実問題を原理論で議論するには、徹底的な抽象化が前提となります。
- 「査定」とか「勤続」という歴史的現象を構成するファクタを分析し、たとえば『資本論』冒頭の商品論をこえるレベルまでまず抽象化しないかぎり、
- 眼前の事象を理論的に考察することは不可能だと思います。

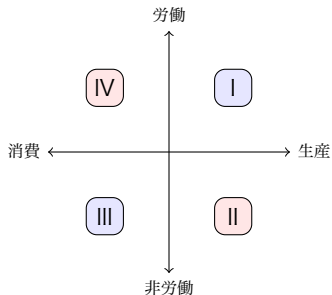
方法の問題

- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、
- こうした現実問題を原理論で議論するには、徹底的な**抽象化**が前提となります。
- 「査定」とか「勤続」という歴史的現象を構成するファクタを分析し、たとえば『資本論』冒頭の商品論をこえるレベルまでまず**抽象化**しないかぎり、
- 眼前の事象を**理論的に**考察することは不可能だと思います。
- 「原理論における....」というかたちで、生モノを原理論にもちこむのは禁物です。

方法の問題

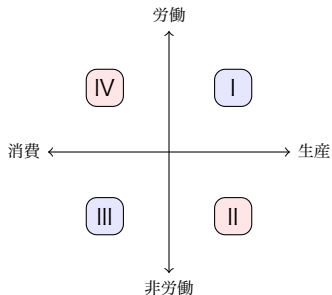
- 第3章は「能力主義」という特定の歴史的状況のもので問題となった議論について
- 「原理論における評価の可能性」「原理論における勤続昇級の可能性」というかたちで
- 理論的考察を加えようとしているわけです。
- こうした問題は、原理論の問題ではなく、段階論をふまえた現状分析でやるべきだ、といったドグマにずっと対決してきた私にはたのもしくもあるのですが、
- こうした現実問題を原理論で議論するには、徹底的な抽象化が前提となります。
- 「査定」とか「勤続」という歴史的現象を構成するファクタを分析し、たとえば『資本論』冒頭の商品論をこえるレベルまでまず抽象化しないかぎり、
- 眼前の事象を理論的に考察することは不可能だと思います。
- 「原理論における....」というかたちで、生モノを原理論にもちこむのは禁物です。
- 純粹資本主義のhardheadedから、「だからいわんこっちゃない」という声が聞こえてきそう...

「消費における労働」 p.176



- 「通常理解」だと私が考えているのは...

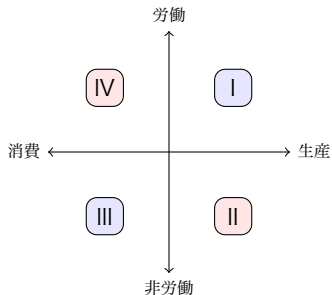
「消費における労働」 p.176



- 「通常理解」だと私が考えているのは...

- 1 労働の結果が生産である

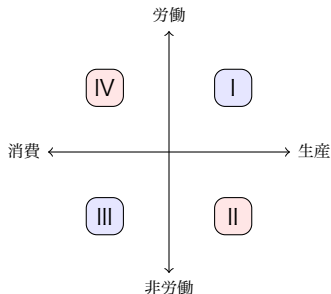
「消費における労働」 p.176



■ 「通常理解」だと私が考えているのは...

- 1 労働の結果が生産である
- 2 消費は労働なしにおこなわれる

「消費における労働」 p.176



- 「通常の理解」だと私が考えているのは...

- 1 労働の結果が生産である
- 2 消費は労働なしにおこなわれる

- つまりⅠとⅢしかみていない、と解釈しています。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、ⅡやⅣも考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱは「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱ は「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。
- 「無労働」は「非労働」じゃない、「完全オートメーション」ではⅡ の説明に「不適切」だ、というのは、「非労働」という「労働」があるのじゃないか、とどこかで考えているためでしょう。でも、「非労働」というのは労働がないんです。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱ は「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。
- 「無労働」は「非労働」じゃない、「完全オートメーション」ではⅡ の説明に「不適切」だ、というのは、「非労働」という「労働」があるのじゃないか、とどこかで考えているためでしょう。でも、「非労働」というのは労働がないんです。
- Ⅳ が具体的に論じられていないのは、労働と非労働を目的意識で分岐させたからだ、だから「非労働による消費」が居場所を失っている」というのですが、

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱ は「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。
- 「無労働」は「非労働」じゃない、「完全オートメーション」ではⅡの説明に「不適切」だ、というのは、「非労働」という「労働」があるのじゃないか、とどこかで考えているためでしょう。でも、「非労働」というのは労働がないんです。
- Ⅳ が具体的に論じられていないのは、労働と非労働を目的意識で分岐させたからだ、だから「非労働による消費」が居場所を失っている」というのですが、
- これは「通常理解」が「労働：生産 vs 非労働：消費」だから立ちいらなかったまでのことです。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱ は「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。
- 「無労働」は「非労働」じゃない、「完全オートメーション」ではⅡの説明に「不適切」だ、というのは、「非労働」という「労働」があるのじゃないか、とどこかで考えているためでしょう。でも、「非労働」というのは労働がないんです。
- Ⅳ が具体的に論じられていないのは、労働と非労働を目的意識で分岐させたからだ、だから「非労働による消費」が居場所を失っている」というのですが、
- これは「通常理解」が「労働：生産 vs 非労働：消費」だから立ちいらなかったまでのことです。
- 私はこの領域も理論的にもっと分析しておく必要があると思っていますが、それは十分に抽象化することを通じてなされるべきで、ここであれこれ具体例を並べるのは、理論の純度を落とすだけです。

「消費における労働」 p.176

- これに対して、Ⅱ や Ⅳ も考えてみる必要がある、というのが主旨。
- Ⅱ は「労働の結果が生産である」というドグマへのいわばシニカルです。「完全オートメーション」だけではなく、人間がトリミングした「自然過程」も、『資本論』の「労働力の再生産」も、ある意味では同じで、「労働なき生産」を考えているのです。
- 「無労働」は「非労働」じゃない、「完全オートメーション」ではⅡの説明に「不適切」だ、というのは、「非労働」という「労働」があるのじゃないか、とどこかで考えているためでしょう。でも、「非労働」というのは労働がないんです。
- Ⅳ が具体的に論じられていないのは、労働と非労働を目的意識で分岐させたからだ、だから「非労働による消費」が居場所を失っている」というのですが、
- これは「通常理解」が「労働：生産 vs 非労働：消費」だから立ちいらなかったまでのことです。
- 私はこの領域も理論的にもっと分析しておく必要があると思っていますが、それは十分に抽象化することを通じてなされるべきで、ここであれこれ具体例を並べるのは、理論の純度を落とすだけです。
- 私にはこの準備がないので、もし言及すれば、安田さんがp.178の最後の段落で書いているような内容で終わるでしょう。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」 (= 純生産物を生みだす) かどうかはきまる。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」(= 純生産物を生み出す) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」 (= 純生産物を生み出す) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。
- 絶対的消費（アウトプットを生まないインプット）という仮定を導入する必要。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」 (= 純生産物を生み出す) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。
- 絶対的消費（アウトプットを生まないインプット）という仮定を導入する必要。
- これは、「自然過程」が物理化学的反応の「トリミング」を仮定したのと同類。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」(= 純生産物を生み出す) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。
- 絶対的消費（アウトプットを生まないインプット）という仮定を導入する必要。
- これは、「自然過程」が物理化学的反応の「トリミング」を仮定したのと同類。
- 絶対的消費、つまり最終消費は、労働者の生活物資を対象とする。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」(= 純生産物を生みだす) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。
- 絶対的消費（アウトプットを生まないインプット）という仮定を導入する必要。
- これは、「自然過程」が物理化学的反応の「トリミング」を仮定したのと同類。
- 絶対的消費、つまり最終消費は、労働者の生活物資を対象とする。
- これは、生活物資を投入して、労働力を生産する、という命題の棄却。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

安田さんは小幡が生産と消費を「量的」にしか規定していないと批判。量的規定の確認。

- 生産と消費の原義は、モノ (= commensurable object) の増加：生産、減少：消費。
- 個々の生産過程は「生産的消費」。∴生産か消費かは個別的には判別不可能。
- 社会的再生産として「生産的」(= 純生産物を生みだす) かどうかはきまる。
- それでも生産と消費の区別は、社会的再生産のなかから導出されるものではない。
- 絶対的消費（アウトプットを生まないインプット）という仮定を導入する必要。
- これは、「自然過程」が物理化学的反応の「トリミング」を仮定したのと同類。
- 絶対的消費、つまり最終消費は、労働者の生活物資を対象とする。
- これは、生活物資を投入して、労働力を生産する、という命題の棄却。
- 「最終消費が存在する」という命題と「労働力の（再）生産」という命題は両立しない。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- 安田さんは、量的規定ではダメで、消費の「質的規定」が必要だと主張。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- 安田さんは、量的規定ではダメで、消費の「質的規定」が必要だと主張。
- では「生産・消費の質的規定」とはなにか？ と読み込んでみると二つのpreconceptionがある。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- 安田さんは、量的規定ではダメで、消費の「質的規定」が必要だと主張。
- では「生産・消費の質的規定」とはなにか？ と読み込んでみると二つのpreconceptionがある。
 - 1 「家庭」でなされる行為は「消費」である。だが、これは同義反復。「家庭」の抽象化、概念化が欠落。トラックが「工場」のなかを走っている間は「生産」で、外にでたら「流通」というベタな規定と同類。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- 安田さんは、量的規定ではダメで、消費の「質的規定」が必要だと主張。
- では「生産・消費の質的規定」とはなにか？ と読み込んでみると二つのpreconceptionがある。
 - 1 「家庭」でなされる行為は「消費」である。だが、これは同義反復。「家庭」の抽象化、概念化が欠落。トラックが「工場」のなかを走っている間は「生産」で、外にでたら「流通」だというベタな規定と同類。
 - 2 「生産的労働でない労働」がなされれば「消費」。「消費はそれ自体が目的とされる主体的・目的的行為であり（… って、目的・手段を分離しない無目的的行為でしょう）、消費に伴う労働は手段化されておらず、効率性は後回しにされる。」(p.178)

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- 安田さんは、量的規定ではダメで、消費の「質的規定」が必要だと主張。
- では「生産・消費の質的規定」とはなにか？ と読み込んでみると二つのpreconceptionがある。
 - 1 「家庭」でなされる行為は「消費」である。だが、これは同義反復。「家庭」の抽象化、概念化が欠落。トラックが「工場」のなかを走っている間は「生産」で、外にでたら「流通」だというベタな規定と同類。
 - 2 「生産的労働でない労働」がなされれば「消費」。「消費はそれ自体が目的とされる主体的・目的的行為であり、消費に伴う労働は手段化されておらず、効率性は後回しにされる。」(p.178)
- 二番目のpreconceptionをみればわかるように、要するにここでも、グレーゾーンを継ぎたす、あの広義・狭義アプローチが採用されているのです。つまり「生産的労働」だけが労働ではない、それは「狭義の労働」で、効率性が「後回しにされる」「消費のための労働」も含む広義の労働が存在する、というのだと思います。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- しかし、これは二重の混乱に導きます。

「生産・消費区分」：量質二元論批判

- しかし、これは二重の混乱に導きます。
 - 「生産・消費区分」が「労働」の規定にディペンド。通説とは逆に「労働なき消費」の領域が消滅。消費は消費のための労働による、という帰結。

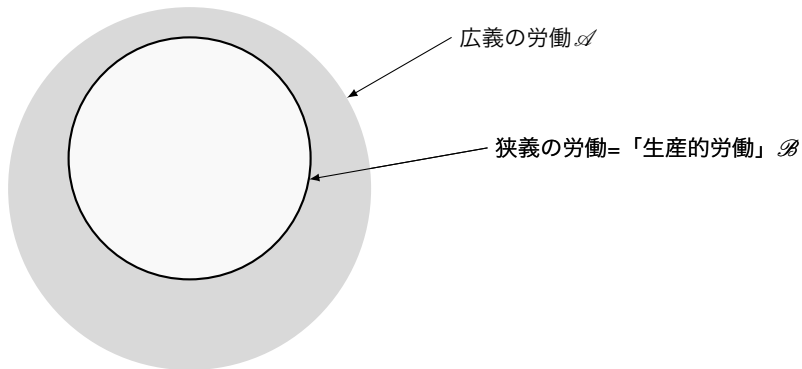
「生産・消費区分」：量質二元論批判

- しかし、これは二重の混乱に導きます。
 - 「生産・消費区分」が「労働」の規定にディペンド。通説とは逆に「労働なき消費」の領域が消滅。消費は消費のための労働による、という帰結。
 - 「生産的労働」のまわりに、“広義の労働”というグレーゾーンを設置することは、けっきょく、「生産・消費区分」を「質的に」明確にするのではなくただ曖昧にするだけです。

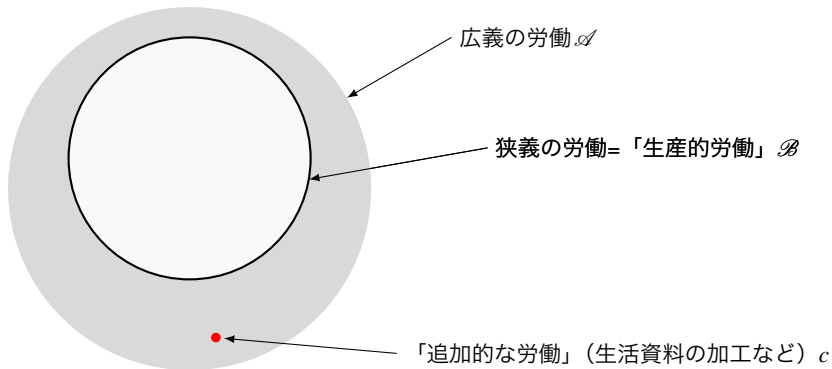
「生産・消費区分」：量質二元論批判

- しかし、これは二重の混乱に導きます。
 - 「生産・消費区分」が「労働」の規定にディペンド。通説とは逆に「労働なき消費」の領域が消滅。消費は消費のための労働による、という帰結。
 - 「生産的労働」のまわりに、“広義の労働”というグレーゾーンを設置することは、けっきょく、「生産・消費区分」を「質的に」明確にするのではなくただ曖昧にするだけです。
- 「消費における労働」とは消費対象である生活資料 K_m を、いわば追加的に加工・生産する労働である。」(p.179)というのは、要するに「消費における労働」は「生産する労働」であるということになります。

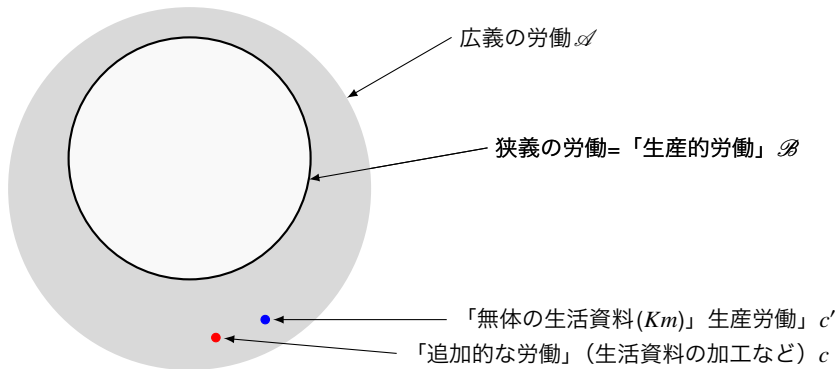
「生産・消費区分」：量質二元論批判



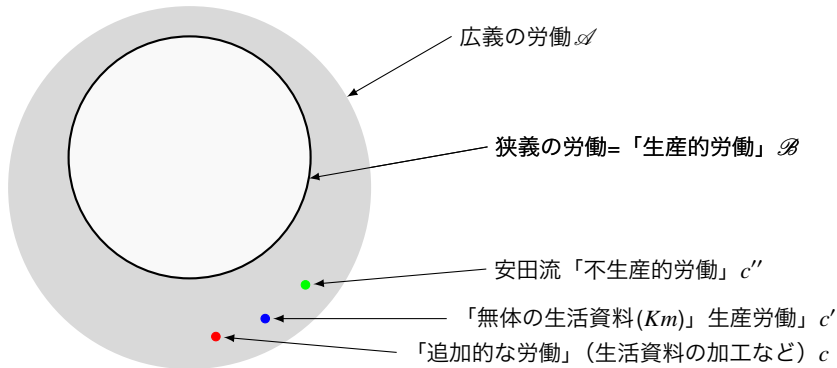
「生産・消費区分」：量質二元論批判



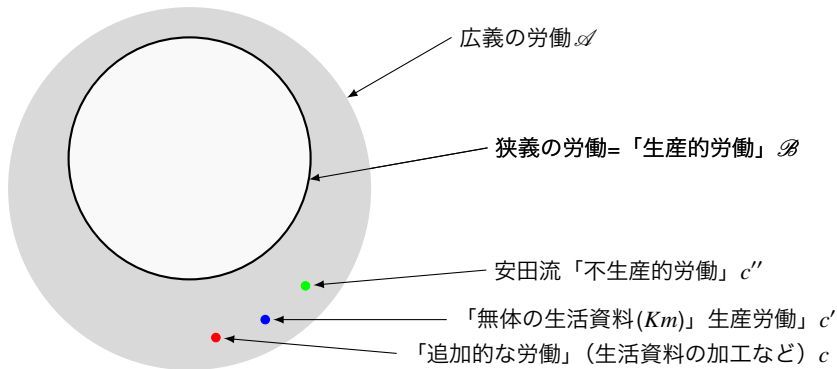
「生産・消費区分」：量質二元論批判



「生産・消費区分」：量質二元論批判



「生産・消費区分」：量質二元論批判



- 狭義・広義の発想法に頼っているかぎり、クリアな原理論はできない。

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、
- 廃棄物を減少させる過程は「消費」となる。

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、
- 廃棄物を減少させる過程は「消費」となる。
- ただの言葉遊びのようにみえるかもしれないが、

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、
- 廃棄物を減少させる過程は「消費」となる。
- ただの言葉遊びのようにみえるかもしれないが、
- 労働＝生産というドグマにとらわれているかぎり、

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物进行处理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、
- 廃棄物を減少させる過程は「消費」となる。
- ただの言葉遊びのようにみえるかもしれないが、
- 労働＝生産というドグマにとらわれているかぎり、
- 環境問題を正確に捉えることもできない。

「消費における労働」で考えたかった問題

- たとえば産業廃棄物を処理する労働を考えると、
- それを排出した工場における労働と変わるところはない。
- ゴミ処理だからといって目的意識的な性格が弛緩したりすることはない。
- 労働しては同じ性格のものであるから、では、産業廃棄物処理は「生産」か、というと
- 廃棄物が結合生産物として「生産」されると規定するかぎり、
- 廃棄物を減少させる過程は「消費」となる。
- ただの言葉遊びのようにみえるかもしれないが、
- 労働＝生産というドグマにとらわれているかぎり、
- 環境問題を正確に捉えることもできない。
- たとえば、こうした現実的諸問題の解明が、生産と労働の直交化という概念を要請するのです。